

1 学校教育目標	2 本年度の重点目標(心、学力、郷土愛)
高きに和す 笑顔あふれる チーム兵庫	①思いやりの心と規範意識の向上 ②確かな学力の定着 ③ふるさとを愛する子どもの育成

重点目標を具体的に評価するための項目や指標を盛り込む

3 目標・評価							
① 心の教育を推進する							
領域	評価項目	評価の観点 (具体的評価項目)	具体的目標	具体的方策	達成度	成果と課題 (左記の理由)	具体的な改善策・向上策
教育活動	●心の教育	人権・同和教育の充実	・年間指導計画に沿って人権教育や道徳教育を計画的に行うと共に学校生活全般にわたって、指導していく。 ・縦割り活動などを通して互いに認め合い、人とのかわりを大切に子どもを育てる。	・道徳性の育成に資する体験活動を推進し、道徳実践力の向上を図る。 ・ふれあい道徳として、参観日に道徳の授業を公開し保護者・地域の方に本校道徳教育の理解を求める。 ・月初めに「命・いじめを考える日」を設定し、相手を思いやることの大切さを考えさせる場を設ける。 ・出番、役割、責任、承認を通して自己肯定感を育む。	A	・6月の人権・同和教育授業実践交流会に向けて全職員が研修を深め指導に生かすことができた。授業を通して学年に応じた人権意識を高めることができた。 ・道徳性育成の一つとして、外部講師を招き情報モラルの授業などを行い、道徳実践力の向上を図ることができた。 ・ふれあい道徳では、各クラスの授業を事前に一覧表にして「ふれあい道徳便り」として保護者に配布し、参観の参考にもなった。 ・「いじめ・いのちを考える日」では、毎月各学級で指導を行った。また、指導した内容を各学級ごとに記録し、その後の指導に有効であった。	・いじめ・いのちを考える日の指導について、同学年や他の学年でどのような指導を行ったのかを交流する時間を確保して、次の指導に生かしたい。
教育活動	●いじめ問題への対応	人権教育の充実	重点指導事項(2つ) ①「ほかほか言葉」を使う児童を90%以上にする。 ②友達には「さん・くん」をつける児童を80%以上にする。	毎月、心のアンケートを実施する。 ・毎月保護者へのアンケートを行い、実態や要望を把握する。 ・人権教室・人権週間を定期的に行う。 ・全校朝会において約束事について指導し振り返らせる。 ・各学期の始業式の日「レインボー作戦」の指導を全校で行い、その後各学級で指導を行う。 ・教育相談週間を設け、子どもの心の様子を把握する。	A	・児童への心のアンケートと保護者への生活アンケートを毎月実施し、児童の実態把握や保護者の意識把握に役立った。 ・毎学期の人権教室の人権教室により、相手の気持ちを思いやる児童が増えた。 ・「ほかほか言葉」を使う児童が95%となり、昨年度より言葉遣いへの意識が高まった。 ・友だちに「さん・くん」をつける児童が91%になり、意識の高まりが見られた。 ・学期はじめの全校指導「レインボー作戦」を受けて、各学級での指導に生かすことができた。 ・教育相談週間を各クラスで実施し、一人ひとりじっくり話すことで、小さなトラブルを早期発見でき、解決できた。	・保護者へのアンケートを毎月実施したことで学校では分からないことに早期に対応することができた。来年度も引き続き実施していきたい。 ・児童が主体となって「レインボー作戦」を行ったことにより、児童の意識が高まったと思われる。来年度も引き続き意識の向上を目指し、全校での話を受けた後、各学年、各学級で取り組んでいく。 ・「こまったときにすぐに相談している」児童が89%なので、すぐに相談できる環境作りをしていきたい。
教育活動	○特別支援教育	特別な配慮が必要な児童への支援の充実	配慮が必要な児童の「個別的教育支援計画」をもとにして、個別の指導計画を作成し、指導に活かす。	・継続的指導が必要な児童に加えて、新たに配慮を要する児童の支援計画を作成する。 ・個別の支援会議や校内研修で児童の支援方法についての共通理解を深め、具体的な支援に生かす。 ・「障害のある子どもの学校生活支援事業」による巡回相談員や外部専門家を招いての研修会を随時行う。	A	・配慮が必要な児童は、個別の支援計画を作成して支援に生かすことができた。年度途中でも必要な場合は支援計画を作成して、支援に生かした。 ・支援会議を随時開き、担任、関係職員等で支援の方法を話し合い共通理解を図った。また、必要な場合は保護者にも話をし、特別支援学級に入級の運びとなった児童もいた。 ・県の巡回相談を利用することで、児童の具体的な支援方法を知り、支援に生かすことができた。 ・特別支援学級の授業を全職員に見てもらったり、特別支援に関する研修を行ったりすることで、全職員で特別支援教育の理解を深めることができた。	・配慮が必要な児童に適切な支援をできるように、今後も必要に応じて支援会議を開いたり、生活指導員の配置を学期ごとに見直す等の体制を整えたい。
② 学力の向上を目指す							
領域	評価項目	評価の観点 (具体的評価項目)	具体的目標	具体的方策	達成度	成果と課題 (左記の理由)	具体的な改善策・向上策
教育活動	●学力向上	算数科の学力向上	・単元ごとに評価テストを実施し、各学年の達成率の平均を80%以上にする。 ・学年に応じた家庭学習時間を達成する児童を90%以上にする。	・算数科における研究授業を全職員で行い、課題意識を高める工夫や話し合いが深まる授業の工夫をする。 ・4、5、6年生の算数の学習において毎時間2Tとし、少人数授業を多く取り入れ、きめ細かな指導ができるようにする。 ・4月に実施する全国・県の学力・学習状況調査の分析結果から、校内研修会で児童の実態を把握し、指導に生かす。 ・スキルタイムを毎週行い、計算力の向上を図る。 ・家庭学習の手引きを配布し、家庭と連携して家庭学習の習慣を身につけさせる。 ・年間を通して4回の「家庭学習がんばろう週間」を設け、家庭と協力して家庭学習の習慣化を図る。	B	・算数科では、少人数担当が担任と連携し、校内研究のテーマである「課題の工夫や話し合い活動の充実」に日々の授業でも研究を深めてきた。また、全員授業で個々の指導力が向上するよう努めてきた。単元毎の評価テストの平均は全ての学年で80%を上回った(87.3%~92.0%)。 ・全国・県の学力・学習状況調査の結果から、各学年の学力を分析し、弱点と思われるところは関連する単元や復習の時間に繰り返し指導し補強した。 ・「家庭学習がんばろう週間」では、保護者アンケートに加え、児童のチェック表を作り実施することで、児童の意識を高めることに努めた。家庭学習時間を達成した児童は6月の第1回目で91%、11月の第3回で87%であった。2学期に90%を切る目標を達成することができなかったため、継続して実施できるように指導したい。 ・学習のルールの重点目標を決め、ポスター掲示、放送、アンケート等様々な方法を使って徹底を図った。全校で共通理解して指導にあたってことで、授業態度が向上した。	・今年度の校内研究を継続し、来年度は、話し合い活動の充実のために、また、自分の考えを分かりやすく記述できるようにするために、表現の方法を研究して児童に還元したい。 ・担任と少人数担当が密に連携し、習熟度別少人数授業を積極的に取り入れ、各クラス、各単元で効果的な指導を行っている。 ・スキルタイム(のびのびタイム)の内容を再検討し、児童の実態に合わせて、基礎・基本が身につくような内容にしていきたい。 ・来年度も全国・県の学力・学習状況調査の結果から、各学年の学力を分析して、授業の中で児童に力をつけさせ、到達目標を達成できるようにしたい。 ・家庭学習ががんばろう週間への取り組みは、実施前に担任及び学習部から児童へ十分な指導を行い、意欲を高め、実施率の向上を図る。 ・授業だけでなく「家庭学習」や「学習のルール」など、子どもの家庭生活・学校生活における基本的な生活態度の改善も継続する。
教育活動	●教育の質の向上に向けたICT利活用教育の実施	全教諭に対しICT教育に関する指導力の向上	・各教室に配備されたIWBを、年間授業日数の90%以上の稼働をめざす。 ・デジタル教材や機器についての操作技能を高める。	・夏期休業中にICT支援員による校内研修会を開き、IWBを中心とした情報機器のより効果的な活用方法を検討する。 ・授業に有用なアプリケーションの操作について知り、動画などの視聴覚教材をより多く活用できるように情報を共有する。	A	・各教室に配備されたIWBの稼働率は、平均約93%であった。授業でのデジタル教科書の活用は日常化し、その中に含まれる、音声や画像、動画、デジタルコンテンツなどを、適宜、活用しながら、わかりやすい授業の一環を担っている。 ・研究授業や集会での発表では、画像や動画の提示をより多く用いている。日常の授業でも、さらに、効果的に提示するために加工、編集の技能を高め、視覚的構造化を進めたい。	・ICT支援員の月2回の来校日には、IWB等のメンテナンスだけでなく、授業に有効なソフトやアプリなどの紹介とその操作、活用法を共有できるように、職員へのミニ研修を充実させる。 ・職員間でも、有効なデジタル教材の共有のために、紹介の場を設定する。
学校運営	○学年・学級経営	学年・学級経営の充実	・PDCAサイクルを取り入れたり、Q-Uテストの結果を活かして、学級経営に生かす。 ・学年の協働意識を高め、職務の効率化と児童への指導の充実を図る。	・学級経営案を公表し各自の取り組みに対して意識化を図る。 ・木曜日の学年会の中で、情報交換や協議を行い、共通理解に基づいた協働を推進する。	B	・夏期休業中に、Q-Uテストの結果の分析を全ての学級で行い、2学期以降の学級経営の手立てを考えることができた。アンケートの結果を基にした学級作りをしていると答えた職員は、「大体できている」を含め92%である。 ・学年主任を中心とした体制がきちんとできており、事象が発生した時には学年主任を中心に動きができていた。	・Q-Uテストの2回目を行うことで、手立ての有効性が確認できるが、現状では行えていない。予算等を含め今後の課題である。 ・学年での情報交換や、学年対応の時間がきちんと取れるように時間を組み入れる。
学校運営	○教職員の資質向上	教職員の資質向上・服務規律の保持	・評価・育成システムを活用し、職務遂行を通して、人材育成・能力開発を図る。 ・講師招聘の校内研修会を行い、指導力の向上を図る。 ・服務規律保持に関する事例研修会を行う。	・年間授業計画をもとに、全員授業研を実施し、授業づくりを全職員で行うとともに、授業の視点を共通理解し参観するとともに、授業研究会で成果・課題を整理し、日頃の授業実践に生かす。 ・いろいろな事例等を連絡会や職員会議でも紹介し、職員の意識を高める。	A	・全員が指導案を書き、校内研究の一環として授業を行い、授業の工夫・改善につながった。授業の視点を共通理解して参観することができたので、後の研究会も活発な意見交換をすることができた。 ・具体的な事例を出して服務規律に関する研修会を行った。	・学習状況調査の結果では、県の平均をどの学年を上回っているものの、観点別に見ると課題も見えてくる。お互いの技術を学ぶことができるようOJTを進める必要がある。 ・時期に合わせて、今最も必要な服務の研修は何かを計画的に研修を行う。
③ 地域を愛する子どもを育てる							
領域	評価項目	評価の観点 (具体的評価項目)	具体的目標	具体的方策	達成度	成果と課題 (左記の理由)	具体的な改善策・向上策
教育活動	○総合的な学習	生活科学習の充実 総合的な学習の充実	・生活科や総合的な学習の中で、地域の人・もの・ことへの学習を盛り込み地域を誇りに感じさせる。 ・保育園・幼稚園や町内福祉施設などとの交流を通して共生社会の一員としての自覚を育てる。	・生活科や総合的な学習の中に、各学年に応じた地域・人・もの・ことに関する内容を盛り込み、児童の体験による学びの場を保障する。 ・学校便りやホームページ等で地域への子どもたちの関りを積極的に情報発信し、地域と子どもたちとの密接な関係を作り出す。	A	・総合的な学習の中で、公民館を訪問し、地域について学んだり、地域の高齢者福祉施設を訪ね学習発表やゲームをしたりして交流するなど、地域の人やものについて学び、そのよさに気づかせることができた。また、その様子を学校通信や、ホームページ等で随時公開することができた。 ・事前、事後学習を含めた入念な計画を立てることで、充実した活動となる。	・施設を訪問する際には、学習内容や時間的なことなど充実した内容にするためには、訪問先の担当者と連絡や打ち合わせを十分にすることが大切である。
本年度の重点目標に含まれない共通評価項目							
領域	評価項目	評価の観点 (具体的評価項目)	具体的目標	具体的方策	達成度	成果と課題 (左記の理由)	具体的な改善策・向上策
教育活動	●健康・体力づくり	運動習慣の改善や定着化 望ましい食習慣と食の自己管理能力の育成	・休み時間には、外に出て元気に遊ぶ児童を育てる。	・兵庫小学校の合い言葉や学年ごとに作成した指導計画にもとづいた指導を継続して行う。 ・生活重点月目標を設定し、集会の講話や掲示資料を活用した指導を行う。 ・生活アンケートを行い、実態を把握し、学校だよりや学年通信を通して保護者への啓蒙を図る。	A	・各学級で「みんなで遊ぶ日」を設定したり、全校で縦割り遊びを実施したりしたことで、大多数の児童が外に出て元気に遊んでいる。 ・朝食を食べることの大切さや効果学ぶ授業を学活や家庭科で実施した。また、年に3回「早寝早起き朝ご飯」チェックシートを実施し、児童および保護者の意識を高めるようにした。朝食喫食率96%となった。	・学級全体や縦割りグループで遊ぶ機会をさらに増やして、集団で遊ぶ楽しさや体を動かす楽しさを感じられるようにする。 ・良い習慣を継続させるよう、授業での取り組みやチェックシートの実施を行い、保護者にも協力を呼びかける。

●は共通評価項目、○は独自評価項目